

雪の世界もまた楽しみがあった

里草会顧問 福井正樹

雪が降り積もるのは、子供のころはそれほど嫌いではなかった。朝雨戸を開けるとこれまでの濡れて黒ずんだ土の世界が真っ白に変化して、家も道も田畑も雪に覆い尽くされて明るくなっているのを見ると、何となく嬉しくなってくる。大人は早速朝飯前に雪道を開けに出なければならないし、みそ汁の野菜を畑に取に行くにも雪を除けねばならない。まして何日も降り積もると危険で重労働の屋根の雪下ろしを考えねばならない。ところが子どもにとってはそんな心配は必要ない。

子供は遊びの天才である。自然にほっておかれても勝手に何かを見つけて群がって遊びを工夫している。雪が降ったらまた遊びの種類が変わってくる。小学校に行っていないような幼い子供たちは、スキーなどの道具を使う遊びには邪魔になるので入れてもらえない。子供の守をさせられている小学生なども、遊び場に来たら邪魔になるので連れてきた子を隅の方に追いやってしまう。

でもそんな幼い子供同士でも雪の中で飽きもせず遊んでいた。白い雪の小さな斜面を踏み固めて、転がったり滑ったりしていた。当時は染色が不十分なので、着ているものの色が溶け出していろいろな色に雪が染まってくる。赤や青に白い雪が染まるのが不思議で、キャーキャー言いながら雪にまみれていた。思い出してみると、服が濡れて冷たかったことであろうが、そんな感覚は記憶に残っていない。

私は大阪から疎開した時にも、背丈を越すような雪の庭で、囲炉裏端の十能を持ち出して、雪と飽きずに戯れていた。家を訪ねてきたおばあさんが、そんなことしたら寒いし濡れるからと抱き上げて家に連れて入ってくれたのだが、すごく遊びの邪魔をされたようで不満だった。大阪では体験したこともない見上げる雪の世界は、今でも新鮮にまぶたに浮かんでくる。

大きな牡丹雪が空から湧き出すように降りてくる。上を眺めているとみんな灰色で囲炉裏の灰が降ってくるようなのに、地面に触れた途端に真っ白になって降り積もる。あの舞い踊る虫のような灰色がどうして真っ白に変わるのか、不思議で飽きずに眺めていた。

少し成長してスコップなどを使えるようになると、みんなで村の道を占拠してスキー場を作った。片側は石垣だったり、池があったり側溝があったりするし、時には雪が少なくなって地肌の出ているところもある。日当たりの悪いところは雪が残っているのだが、人通りの多いところなどはぬかるんだりしている。そんなところにあちこちから雪を運んで来て地面を覆うのだ。地面が露出していると、勢いよく滑り降りて来たら一瞬にして転んでしまう。時には石垣に当たり池に突っ込みそうになったりして、制御が難しい。やはり長い斜面は村の中のゆるやかな坂になった道のほうが適している。ここに雪を集めてなめらかな遊び場を作って置くと、翌日固く凍ったり、その上に薄く雪が積もったりして、スキー場としては最高だ。ところが大人は滑って転んだりするし、歩きにくいのでスコップで割って雪

を捨てたり凸凹に刻んで階段のようにする。しばしば年上の子が「ここで滑るな!」と叱り飛ばされる。

山裾を開墾してモモなどの果樹を植え緩やかな斜面になっているところをスキー場にしたら、せっかく育った果樹の枝先を飛ばしてしまうとまた叱られた。山に入り込んで林の中などの斜面を使ったりするが、上から雪の塊が落ちてきたり、葉先から溶けた雪水が落ちて滑りにくいものだった。

スキーと言っても、ちゃんとした木の板のものなど持っているものは誰もいない。背丈ほどの孟宗竹を四つわりにして、その二片を針金でつなぎ、先端をたき火であぶって反り返るように曲げる。真ん中あたりに手ごろな板を打ちつけ自転車の古タイヤなどで長靴をさし込む輪を作る。私が小学生の低学年の頃は上手にできなかったので、従弟が作って持ってきてくれた。軽くて太い孟宗竹で引っかかるとうろたえるように節を削り、あぶって竹の油で良く滑るようにしてある。

こんなスキーだから技術も制御もできなくて滑り降りるだけだ。大学に入学したころ山岳部でスキーに行ったが、お前の滑り方は転ばないスキーだと馬鹿にされた。クリスチャンアだボーゲンだとスキーの技術が普及し白銀が招く時代であった。子供の頃の竹スキーでは、山裾や田畑を歩き回り、雪の斜面を滑り降りるのがせいぜいの楽しみ方だ

雪の世界で最高に素晴らしいのは、雪の表面が固く凍って乗っても沈まない状態になった時である。相当深く雪が積もり、何日か陽射しがあって雪の表面が融けてなめらかになり、それが夜間の冷却で固く凍ると、雪原を駆け回っても沈まない。体重のある大人は無理だが体の軽い子供は田や畑を覆った雪の上を存分に駆け回ることができる。学校まで自由気ままに平らになった雪の上を走ってゆく。田んぼの畦から飛び降りたりすると表面が割れて体が沈むこともあるし、日陰などで凍り方の弱いところでは沈んで雪まみれになるが、白一色の広い田畑を存分に自由に駆け回れるのは楽しかった。陽が射して温度が上がってくる昼前くらいには、雪の表面が融けて乗れなくなる。

学校では雪合戦もするが村では子供の数が少ないのであまりやらない。雪玉を作って何かの標的を狙って競争したり、雪だるまを作るために雪を転がして力を合わせて大きな球を作ったり、村の中の小川を雪で堰きとめて洪水を起こさせたり、雪を掘ったり積み上げたりして中に入れるくらいの洞を作ったりして、仲間が集まると何かして雪を遊びの道具にした。

私は遊び相手が無い一人っきりの時は、雪の上にもみ殻などを撒いて小鳥を誘い、大きな竹のざるなどで中に入った小鳥を採る仕掛けをした。竹筒を細工してざるの支えを作り、鳥が中に入って餌をついばむと支えが外れて鳥を生け捕るのである。また釣糸で小さな輪を作り小鳥が足を引っ掛けるような仕掛けもしたが、うまく捕れたことはなかった。ただ一度小屋に迷い込んだキジバトを獲ったことがあり、祖母がゴボウなどの入った混ぜご飯を作ってくれたのがとてもおいしかった記憶がある。竹スキーで桑畑を廻り、ヒラタケを収穫してお汁に入れてもらう事もあった。今でも素朴な冬の遊びがよみがえる。